

髪は後冠とて一く髪髪もよく入るはびんぐの
 硝子店やアソビの店人榮子とてはびんぐも
 くりとる小房もの店うふ棒のちりきんまん
 矢倉念を敷のどんううや四方八方入ヤトと
 くら大娘ひあ代米の髪鬘花の都とて
 今どりのけあそりや入りうらんと糸糸
 礼の田舎のよとぬけありの鼻とれ娘やまぐ
 漆家の疔を尻痛とちり焼那が糸のき
 の毒と眉間の皺をよ祈とて仲と祈の

煉瓦がもろいさうく髪よく伏見久下
 房の葉とくじ浪花はもゆふさし海陸を
 越よ古つふゆりもろくやとてあうとて
 所後とぬに貝抄子焼とて登一の糸
 ととる橋ての糸七糸

髪もの類

上糸一糸堀川の巻糸田丸や何糸とて
 糸ものやあひせ一人背小島ま正月
 中旬場まの病ふとてれ人半も毎とて

しが正月廿九日下系より出火し〜
 勢分とともけ忍ろ〜
 されども上系一〜
 ば着〜
 々付が〜
 系に飛火〜
 とり〜
 されども大傷〜
 にあ〜

かせんと〜
 中人長持〜
 くれ〜
 あり〜
 ち〜
 こと〜
 名級〜
 徒縁〜
 して〜

下出巻一

三

さぶらりんねに方い名取されぬおのれ死に
 一 瓜棺に入る路をふとくすくすの鬼ども
 が呵笑せんまゝに棺は棺お那るまゝ
 されども葉葉にのりしとたさしとく
 来れどもささくすくすく断りてさ鬼
 どりゝおのれゆらひとく長持よりぬ
 とまじりてささくすくすくおのれ
 果て方おそれぬ人どもおそれぬ
 ちりぬおのれぬとくすくすく遠東

南の方と見えしとてささくすく
 のとめれた叫ぶおのれおのれおのれ
 一 同地獄より人々鬼人ども
 と鬼どもおのれおのれおのれ
 いくよもしておのれの道ふゆらと
 行よあさくより火よおのれおのれ
 されてうけおのれおのれおのれ
 さらしてささくすくすくおのれ
 人の肩ふくすくすくおのれ

く只今いひ驚おどろしつゝのちるおどろ人ひとなまやせ世
 界よよりぞいそむものし日ひ来きるよそぞあらん
 とふふころあま迷まよひしわらひのこころいそむ
 とあはれはらるがあさむしひの堂どうあつて灯あかり明あ
 るとさうふん人ひとたれは漸しぜんとつてさきさき
 小こあつて恐おそし堂どうの内うちふ多おほくま王おう修しゆ生せい神しんとろく
 列りよく成なりかゝ儼げん然ぜんとして並ならびの人のいそむるあやど
 小こくすくすなるおの聴きるおのぐとあひそあひそかうあ
 曉あけぬつたゝくよみそ来きぬあ安あ婆はよありとる人

ちあつとせもあ梅うめ花はなびのよのよのあめよと
 まもかゝおお念ねん仏ぶつもお竹たけの空そらめくあ鹿か科か
 もお淨じゆくお竹たけにあ梅うめ花はなよあ送おくりあらあとあいあよ
 とあつとのよよのよかゝいいつつるあめあふあつあつあ
 程ほどと忍しの入いくあわあとあ程ほどとああげあてあてあてあ内うち
 遙とほふあのあ孫まごのあ音ね念ねん仏ぶつのあ智ちけあつありあとあとあと
 西にし方かた梅うめ花はなの上うへ品ぶhin上うへ生せいるあ人ひととああひあつあ
 くあいあんあさんあにあ教しよひあとあ私わがのあ安あ婆はのあ付つけあ人
 小こてあ付つりあ観くわん音おんとああつありあとあ私わがをあとあけあとあを

不出卷上

三

多入りく百寶花嚴の蓮臺の上ふのせ
 せられとあき思へん仲に又あつたせられ
 登人ともものおとりの迹なき追ひておぼに
 あり御の修持なるを怪しむはく人知れぬ
 わげく難ふぞとて思へん傍に人ありて
 中へそまふゆゑのにうらふ人て風の遠ひなる
 よわらふ子本の多んや雲の氣なきあつたれ
 よとりにてはまのこころ念仏一とあり
 かりが秘するく候へたのごとく明らなるあか

とかかふるふ松の樹影のうらなうのなき元禮まこと
 と今も風月がごとく圍ひ笑へん女ふどり
 能細よりかかると見るとまはれ梅はさるんと
 まごち後人地さあやいじやうくくもふぶく
 人乃に異なるまふあふとてあやなくまふ
 なるふあさごうり老むる友人ありこれ
 いかにいふふ初めく終のふふあり後のこめ
 とかかふるふよとていふふ船圍の跡をいふて
 あつたりの人さるふあはてまがけあはれ

うるりのこのとれた熱身あつみの冷汗ひやあせして傷寒やうかん乃
 熱あつもこもぐくさめ我身わがみの裏うらに垢あせもも思
 悲かなした一門いんもん毒どくも邪よこしまも室むろもさふさひ一いつく
 万ばん半はんの昔むかしの世よといふ事ことはさうりそを喜が提たい
 の種たねとふし髪かみとそり夜よるは裏うらにそめく仏ぶつつよ
 入いりて邪よこしまけさうりそをなめぐりそりそとあひ
 信しんぐと念ねんの中ちゆうく世よは後ごとものうとふくくぶれ
 いけ仏ぶつの中ちゆうにぬりりそぞれ衆しゆ生じやう縁えん起きと
 仏ぶつのとなぬべ火か半はんにわくくつね者ものをなほと

しんものうたのひとあやせも喜が提たいの物ものゆ
 うりうりふりうた昔むかし智ち徳とくもく信しんももわされ
 ばや御ご小せう長ちやうものうりりそり信しんもも室むろ小せう太平たいへい
 の玉たまりのよも世よ縁えんされがとせじご影かげのひなも
 あり実じつよも彼かの男おとこのりもぐく世よ縁えんされがとせ
 けは長ちやうののうりりもさうりぬあのとあふよ
 つけくも君きみのあふみれりもかーさくさうり
 やたゆんたる中ちゆう人にん大だいれめちとせも万ばん民みん業ぎやう半はん
 とのよみて都みやこの懸けんたれ日ひふ百ひゃく倍ばいせりぞ目め出で

とらやうと月もさうしとていし寧ろ早はうみん
とく机にうくましく思甜瓜僧しぬ

哦花嘯月謫仙醉 石枕中衾陳博眠
清福初知今日樂 竟風舞雨太平年

花紅葉都咄卷上終

花紅葉都咄卷下

一上様方候の沛き所 武都方候沛き所也

畧し右云上の燈は小出に候に畧し

一又後二月と句建仁寺より日と教石の粥は

たきらと凡一ヶ月候りのるは是を徳人ふ徳し

ゆ人は是をいひ飢かつか候ぐもの候方とり

半瓜考らばされ上仁恵され下も又さ

徳小化し大坂と船通の豪富のもの候とく

と徳は公がしつれは窮人の雨りの巻をね



奮うゝに案有延た仁意うゝとわ
 一さしに災後系北の老たも多きとふれゝとく
 親族朋友との不焼失せしむれとあつとて法
 さんもろく多き松根せしむともきひるるや
 東方まき公拂へく日月の光をさるるがごとし
 所仁政されば所支配の所方とくも老く神め
 の宰しとくまゝゆゑ改道せしむ一言世不修ふ
 されば犯人と交ひまゝに未固備の改めよ
 過ぐばて修罪の知る公分ち理非めしむるに

仁意然に候くゞこれ系北の老ももはると思よ
 かこりく當時の強盗も老るが如くとも外有
 短た所觸目く作出これたれは老く案北の老ひ
 とふし者短と未小老ぬ又老持の町人等ふ
 他はに出るの公禁トあひ又老普修考の務ふ
 此所建て一抱を安備を西村のとももの信や
 抱を安の分たよく建て一老よ老情物未
 ぐとたりの七老ふと一老一或の道があらひ乃
 小老よと老のらひ老案公とびじ一と

仲乃るものごとく津免作任付るは者も家業
と考へにまへて限首越え上意あり大工日雇
とも限首銀平日の通りより銀分むとがけま
したる中後より若く銀と念る者も所へ出
べしと又往後材木伐出の後の京都と
つくりたる極の勿痛き價に者入すべしとん
任せらるる又米穀放本を介何よりは賞しめ
る價ふしと一りのみより建所へ出べしと又所
のりのはこの如く上下各利を及ぶ毎うらひ

火災の後の依りははれ敷袴等も正持たる者
ともいふ所のもの終りては終りてはとこととよ
よのく人心味のとこととけ苗時今銀も高
るたりもの終りにと一か或はあやした小豆
かど指ひ家業なと下りた付小ぞ終り廿余日
たつたふを辺の飛指通海しとく万葉平
目小懐にさればゆくは普信始り是小よのく
人心自然と定まり京比大よ終り非道
の若も終り志し瓜段め公命と奉んお意

の利徳の如余を命に授けし人々を懐く
 おん移り自ら徳を修めしむる人々も
 役し御守ふやうのふとくを懐く
 げく徳に及ばぬ女子の衣履も又徳に及ばぬ
 男女の風俗の如く久風流温和の仲小園強と
 さしとてさみ慈愛の不和と作さば北道横車
 と窓を以て或はわらひに考ふるべし
 波に舟を以て器械と推し画を以て器と推し
 風俗亦都の人およびふとく上善を好み

めん下月正に正しん年五歳とて小侍とて
 一果仁老人とて五歳の月分細とる人あり
 くらが子の正月廿九日の夜津東の小沢氏に止宿
 し〜琵琶を弾く〜大人は舞ふ何れもあはれ
 今宵中に天楸一也摺子の姿をそわしとて
 もよく園の東へ去りけし趣かきけし人々と
 きよきとて人々を以て承けし道人琵琶
 とあはれげし人々に聴かす〜とて方とて
 つ〜がき〜〜〜〜〜の大愛起りこの歌も